

# 短文暗誦の授業を

加地伸行氏が「少年よ大志を抱け」—— たったこの一言が実は重い道徳教育になっている  
(産経新聞「正論」と言っている。「仰げば尊し」の「我が師の恩」「身を立て名をあげやよ励めよ」、「故郷」の「志を果たしていつの日にか帰らん」も同じ。子供の頭に短い言葉を植え込む)

## 道徳とは何かが解っていない

新内の師匠について三味線を習っている社長が「しつけ糸の解釈がおかしいのではないか。着物の形を整えるため、はいいが、しつけ糸はできあがった着物が型崩れしないように縫う糸です」と教えてくれた。

私は「着物の形を整えるため、縫い目を導くためしつけ糸でざつと縫う。本縫いが完成すればしつけ糸は引き抜かれる」と書いた。これは仮縫い糸のことで間違いであった。

自分の着物を仕立てることが多い社長は「和服はアイロンなど掛けない。型崩れしやすい。それで要所を糸で縫う。これがしつけ糸。着る前に取るか、襦袢など生地が柔らかいものはしつけ糸を取らないまま着ます」と説明した。

背広の裾の切れ込みにしつけ糸があるが洋服には少ない。和服と比べて形がしつかりしている。必要ないのである。

解釈は間違っていたが、形が崩れるのを防ぐため、正しい形を保つためという「しつけ糸の目的」は合っていた。  
しつけ(躰)は礼儀作法など人としてあるべき美しい形を身につけさせることである。大人が子供にする。子供は犬にはするが大人にはしない、できない。

方針を出すはずがない。  
道徳は人の道。「こうしなさい、これをしてはいけない」と教える先人の知恵である。黙ってありがたく押しただくものである。  
ああじゃない、こうじゃないと議論し、「私はこう考えます」「ではこうしましょう」と新たな見解や解答を出すテーマではない。ましてや未熟な子供がどれがいいか選んで決めることではない。

平成二十七年二月四日、文科省は「道徳の授業は児童生徒が課題を自ら見つけ、自力で解決する問題解決型学習の導入など、より実践的な教育を行う方向に転換していく」と発表した。  
こんな改善案は道徳の授業をますます不毛の意味不明の、スマイルで格好いいだけの失望の、非道徳的な子どもを多産するものにするだけだ。

## 「私たちの道徳」の三つの欠点

小学五年用の「私たちの道徳」を見た(他に小学一二年、三四年、中学校と三冊あるが構成はほぼ同じで私はまだ見ていない)。  
この本は公立小中学校に配布されているが、下村文部科学相は「文科省調査によると九〇%以上の学校が使っていると回答したが、一学期に一回でも使えば使用している」と答えている(ので九〇%は水増し数字と考えられる)。

①言葉があいまいで理解しにくい。たとえば「愛国心」といえばはつきりするのに「国への親しみ」と愛着。「郷土や国を愛する心」とはやくして表現し、その中身は「わが国の伝統と文化を尊重し」「語りつぎ受けつぐ日本らしさ」などで愛国心を養うものになっ

ていない。  
愛国心教育に最適の日露戦争や大東亜戦争について、軍人の活躍について一切触れていない。日本の季節の行事や芸術芸能のすばらしさを子供に教える愛国心は育たない。  
③大項目に厳しさが欠けている。

この「道徳の定義」が解っていない人が多い。文科省の役人も学校の先生も解っていない。解つていれば「私たちの道徳」というピント外れの教材を作るはずがない。解つていけば平成三十年から始める道徳の授業を「子供たちが考え、話し合う授業に」などと珍

経営管理講座 314 染谷和巳

## 暗誦に耐える名文の教科書を

道徳は話し合いでは身につかない。言葉を頭に張り付ける。物語のストーリーは不要である。  
この本でよいと思ったのは、福澤諭吉が自分の子供のために残した「ひびのおしん」。

ひびをこらすべからず  
けものをむごくとりあつかい  
むしけらをむえきに  
こらすべからず  
ぬすみすべからず  
いつわるべからず  
うそをついてひとの  
じやまをすべからず  
これを一語違わずそっくり暗記  
させ、暗誦のテストをする。これが道徳教育である。

文科省はいじめ対策のため小学校低学年から「公平性」を教え、インターネットを使つたいじめに歯止めをかけるため「情報モラルの指導」を充実させるという。そんな難しいことを言わずに、先人の知恵をそのまま拝借すれば足りるのである。

約束を守れ、利己主義はいけない、恥知らずになるな、弱音を吐きな、恩は返せ、怒の心を持って、義理を果たせ、情をかけよ、勇気を奮う、祖先を敬え、親の言うことを聞け、家族のために尽くせ、公共のルールを守れ、先生や大人の言うことに従え、催しやお祭り、行事に参加せよ、怠けるな……。

「学び合い、高め合える友情を」「寄りそうこと、分り合うことから」「支えてくれるその思いを感じよう」「自分の命を見つめてみよう」……こうした心地よく道徳と関係のない文章がずらつと並んでいる。  
道徳とは何かが解っていない人が作った本だということがあきらかである。  
まじめな教師が「こんな本で道徳が教えられるか」と、授業で使えないのが理解できる。

たといえば「約束を守れ」は太平治の「走れメロス」、「うそをつくな」はイソップ物語の「狼と羊飼いの少年」、「利己主義はいけない」は芥川龍之介の「蜘蛛の糸」、恥知らずになるな」は……と厳選する。  
たとえば「蜘蛛の糸」は地獄の悪人たちの中にカンダタという名の男がいた。カンダタは目の前の蜘蛛を踏まずに助けたことがあった。それを思い出したお釈迦様は地獄に向けて一本の蜘蛛の糸をたらした。カンダタはその糸を昇りはじめた。すると気がついた悪人たちが続々と糸にすがって昇りはじめた。カンダタは叫んだ。「俺のための糸だ! 手を放せ! 下りろ!」と、カンダタの上の所で糸が切れ、カンダタは地獄へまっさかさまに落ちていった。  
このように二百字にまとめ、そのままそっくり暗記させ、声に出して暗誦する。  
道徳の教科書は二百ページはいらない。百ページでよい。文章を練り上げ暗誦に耐えられる名文のオンパレードにする。